井相田C遺跡 9

— 井相田C遺跡第10次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1179集

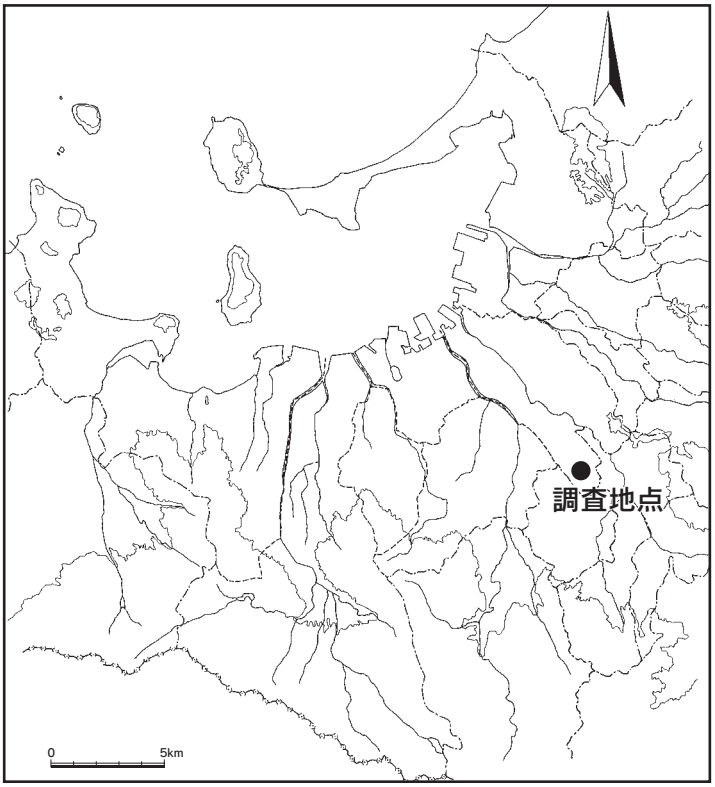
2013

福岡市教育委員会

井相田Ｃ遺跡 9

― 井相田Ｃ遺跡第10次調査報告 ―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1179集



遺跡略号	調査番号
ＩＳＣ－１０	１１３５

２０１３

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を介して大陸・半島と一衣帯水の関係にあり、古代より双方の交流が絶え間なくおこなわれてきました。なかでも博多区には、旧石器時代から中世にかけての遺跡が数多く存在します。近年の著しい都市化により失われるこれらの文化財を後世に伝えることは、本市の重要な責務です。

本書は、共同住宅建築に伴う井相田Ｃ遺跡第10次発掘調査について報告するものです。この度の調査では古代山陽道と西海道の一部「水城東門ルート」とみられる溝を検出するとともに、奈良時代から平安時代にかけての遺物が多数出土しました。これらは地域の歴史の解明、ひいては水城東門ルートの日本史上における位置づけのためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護に対する理解と認識を深める一助になるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、地権者様をはじめとする関係者の方々には発掘調査から本書の作成に至るまでご理解とご協力を賜りました。あつく御礼申し上げます。

平成25年３月22日

福岡市教育委員会
教育長　　酒井　龍彦

例　　言

1．本書は、福岡市教育委員会が共同住宅建築に伴い、福岡市博多区井相田二丁目6番4において実施した発掘調査である井相田Ｃ遺跡第10次発掘調査の報告書である。

2．本書に掲載した遺構実測図は阿部泰之が作成した。

3．本書に掲載した遺物実測図は阿部が作成した。

4．本書に掲載した挿図の製図は阿部がおこなった。

5．本書に掲載した写真は阿部が撮影した。

6．本書で用いた方位は特に断りなき限りすべて磁北で、真北から6°30′西偏する。

7．遺構の呼称は溝をSD、ピットをSPと略称する。遺構番号は発掘調査の際、現場で任意に振った通し番号を特に断りなき限りそのまま用いる。

8．本書にかかわる記録・遺物等の資料は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵する予定である。

9．本書の執筆・編集は阿部がおこなった。

10．本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成24年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性がある。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課に確認されたい。

11．本書で報告する発掘調査の細目は以下の通りである。

遺跡調査番号	１１３５	遺跡略号	ＩＳＣ－10
所在地	福岡市博多区井相田二丁目6番4	分布地図番号	０１２ 麦野
開発面積	1,482.08㎡	調査面積	592㎡
調査期間	平成23年12月12日～平成24年2月3日	事前審査番号	23－2－365

本　文　目　次

はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯
　2．調査の組織

第１章　位置と環境 …… 2

第２章　調査の記録 …… 7
　1．調査の概要
　2．遺構と遺物

第３章　まとめ …… 14

挿　図　目　次

Fig. 1　井相田Ｃ遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/25,000） …… 3
Fig. 2　調査区位置図（1/5,000）…… 4
Fig. 3　調査区位置図（1/1,000）…… 5
Fig. 4　調査区全体図（1/200）…… 6
Fig. 5　調査区北壁・西壁土層断面実測図（1/80） …… 7
Fig. 6　SD01実測図（1/200） …… 8
Fig. 7　SD01土層断面実測図（1/50）…… 9
Fig. 8　SD01須恵器出土状況実測図（1/20）…… 10
Fig. 9　SD01小穴列実測図（1/30）…… 10
Fig. 10　SD01上層出土遺物実測図（1/3） …… 11
Fig. 11　SD01下層出土遺物実測図1（1/3）…… 11
Fig. 12　SD01下層出土遺物実測図2（1/3）…… 12
Fig. 13　SD02・03・04・05実測図・土層断面実測図（1/60、1/30）…… 13
Fig. 14　遺構検出面出土土師器実測図（1/3）…… 14
Fig. 15　井相田C遺跡第10次調査検出の官道側溝と他地点の状況 …… 16

図　版　目　次

PL.1-1　調査区全景（南より）
PL.1-2　SD01（南より）
PL.1-3　SD01東拡張区全景（西より）
PL.2-1　SD01西拡張区全景（南より）
PL.2-2　SD01北土層断面（南より）
PL.2-3　SD01中央土層断面（西より）
PL.3-1　SD01南土層断面（南より）
PL.3-2　SD01北小穴列（南より）
PL.3-3　SD01須恵器坏出土状況（西より）
PL.4-1　SD01須恵器瓶出土状況（西より）
PL.4-2　SD02（南より）
PL.4-3　SD02土層断面（南より）
PL.5-1　SD03・SD04（南より）
PL.5-2　SD03土層断面（西より）
PL.5-3　SD04土層断面（南より）
PL.6-1　SD05土層断面（南より）
PL.6-2　調査区北壁土層（南より）
PL.6-3　出土遺物

はじめに

１．調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区井相田二丁目6番4（敷地面積1482.08㎡）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成23年7月21日付で受理した（事前審査番号：23-2-365）。

これを受けて同教委文化財部埋蔵文化財第1課事前審査係は、申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である井相田Ｃ遺跡に含まれていること、すでに平成21年7月に確認調査が実施され現地表面下50cmで遺構が確認されていることから、遺構の保全等に関して申請者と協議を重ねた。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、共同住宅本体部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。

その後、平成23年12月7日付で有限会社一品香フードサービスを委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成23年12月12日から発掘調査を、翌平成24年度に資料整理・報告書作成をおこなうこととなった。

２．調査の組織

調査委託：有限会社一品香フードサービス
調査主体：福岡市教育委員会
調査総括：文化財部埋蔵文化財第2課長（現・埋蔵文化財調査課）　田中寿夫（23年度）
宮井善朗（24年度）
同課調査第1係長　米倉秀紀（23年度）
常松幹雄（24年度）
調査庶務：埋蔵文化財第1課（現・埋蔵文化財審査課）管理係　井上幸江（23年度）
川村啓子（24年度）
事前審査：埋蔵文化財第1課事前審査係長（現・埋蔵文化財審査課）　宮井善朗（23年度）
加藤良彦（24年度）
同課事前審査係主任文化財主事　加藤良彦（23年度）
佐藤一郎（24年度）
同課事前審査係文化財主事　木下博文（23年度）
森本幹彦（24年度）
調査担当：埋蔵文化財第2課（現・埋蔵文化財調査課）調査第1係文化財主事　阿部泰之

なお文化財部は、組織改編のため平成24年4月1日付で教育委員会から経済観光文化局に移管した。

発掘調査から報告書刊行に至るまで、地権者様ならびに株式会社Ａ＆Ｕ都市・建築事務所様、株式会社中野建設様をはじめとする関係者各位にはさまざまな便宜とご理解・ご協力を賜り、発掘調査は事故もなく順調に完了しました。ここに記して深く感謝申し上げます。

第１章　位置と環境

現在の福岡市の中心的位置を占める福岡平野は、背振山系から発した那珂川と牛頸・四王寺山地から発した御笠川とによって形成された沖積平野である。現在は市街地化が進み旧状はほとんど窺えないが、もとは広大な農村地帯であった。この平野はその中央部に春日方面から延びる低丘陵が位置し、那珂川と御笠川の流域はこれによって画されている。いずれの流域の沖積平野にあってもその微高地には多くの遺跡が存在し、井相田Ｃ遺跡は福岡市域の南端部、御笠川中流域左岸の沖積微高地にある。今回報告する第10次調査地は遺跡の南西縁辺部、那珂古川の流路に南端を接する位置にある。

井相田Ｃ遺跡は、弥生時代前期から中世にかけての遺構・遺物が検出されている複合遺跡である。以下、周辺の遺跡を含めて井相田Ｃ遺跡の歴史的変遷を追っていきたい。

先土器時代は、井相田Ｃ遺跡第1次調査において古代の遺構から三稜尖頭器・台形石器等が出土している。調査地の西方に位置する麦野Ａ遺跡においても弥生時代前期および中世後半期の遺構からナイフ形石器・スクレイパーが出土している。いずれの遺跡も市街地化による遺構面の削平が著しいことからプライマリな状態での出土例はなく、新しい遺構に二次的に流れ込んだ状況での出土である。

縄文時代は主に麦野丘陵上において落とし穴とみられる遺構が検出されている。遺物は石斧・石鏃が新しい遺構に混入する形で少量みられるのみである。

弥生時代に入ると周辺の遺跡ではとくに遺構・遺物が急増し、「奴国」の名にふさわしい様相を呈する。井相田Ｃ遺跡では第3次調査にて前期の遺構・遺物が検出されており、周辺に当該期の集落が広がるものと推測される。その他の調査では旧河川から主に前期の遺物が出土している。中期以降の遺構・遺物は僅少で、遺跡周辺の沖積地は主に水田として利用されたとも考えられる。

古墳時代は第6次・第8次調査において中期～後期の竪穴住居・土壙・井戸が検出されている。主に遺跡の北部に集落が形成されていたことが窺え、首長居宅の可能性も指摘されている。

古代は井相田Ｃ遺跡において最も遺構・遺物が豊富となる。第1次調査では8世紀中葉から10世紀にかけて40棟以上の掘立柱建物跡が検出され、第2次調査の成果とあわせ公的な性格を有する集落と推測されている。さらに古代山陽道・西海道が大宰府に至る最終区間「水城東門ルート」推定線が遺跡の南西部をかすめるように通り、第1次調査および今回報告する第10次調査ではそれに合致する溝が検出された。本遺跡の南東に隣接する井相田Ｅ遺跡では、第1次調査で同様の溝が2本並行して検出されている。既往の調査では路面など道路に直接関連する遺構は検出されていないが、溝の方位や連続して概ね直線的に延びることから古代官道の側溝と推測される。何れの溝からも8世紀～ 12世紀にかけての遺物が出土しているが時期が連続せず、不定期に大規模な再整備をおこなって道路を使用したと推測される。また、麦野丘陵上の各遺跡からは8世紀代の竪穴住居が多数検出されているが、そのほとんどは短期間で廃絶する状況である。

中世は、第1次調査で条里に合致する水田、第2次調査では貯水池の機能を有したと推測される池状遺構が検出され、遺跡が乗る沖積地は完全に水田化されたものと推測される。一部の区割りは市街地化前の水田と合致し、現代までつながる景観がこのとき形成されたのだろう。また、麦野丘陵上には中世後半には東西約150m、南北約110mを測る大規模な溝で区画される方形区画が検出されており、居館ないし城郭、寺院の存在を窺わせる。

本書掲載の埋蔵文化財包蔵地の範囲は平成24年3月現在の推定線であり、現在は変更されている可能性があります。詳細は福岡市文化財部埋蔵文化財審査課にてご確認ください。

1．井相田C遺跡　2．井相田A遺跡　3．井相田B遺跡　4．井相田D遺跡　5．井相田E遺跡　6．麦野A遺跡　7．麦野B遺跡　8．麦野C遺跡　9．南八幡遺跡　10. 雑餉隈遺跡　11. 中ノ原遺跡　12. 那珂君休遺跡　13. 板付遺跡　14. 高畑遺跡　15. 諸岡B遺跡　16. 笹原遺跡　17. 三筑遺跡　18. 仲島遺跡　19. 下月隈C遺跡　20. 上月隈B遺跡　21. 文殊谷古墳群　22. 立花寺遺跡　23. 立花寺B遺跡　24. 金隈遺跡　25. 金隈上屋敷遺跡

Fig. 1　井相田Ｃ遺跡の位置と周辺の主な遺跡（1/25,000）

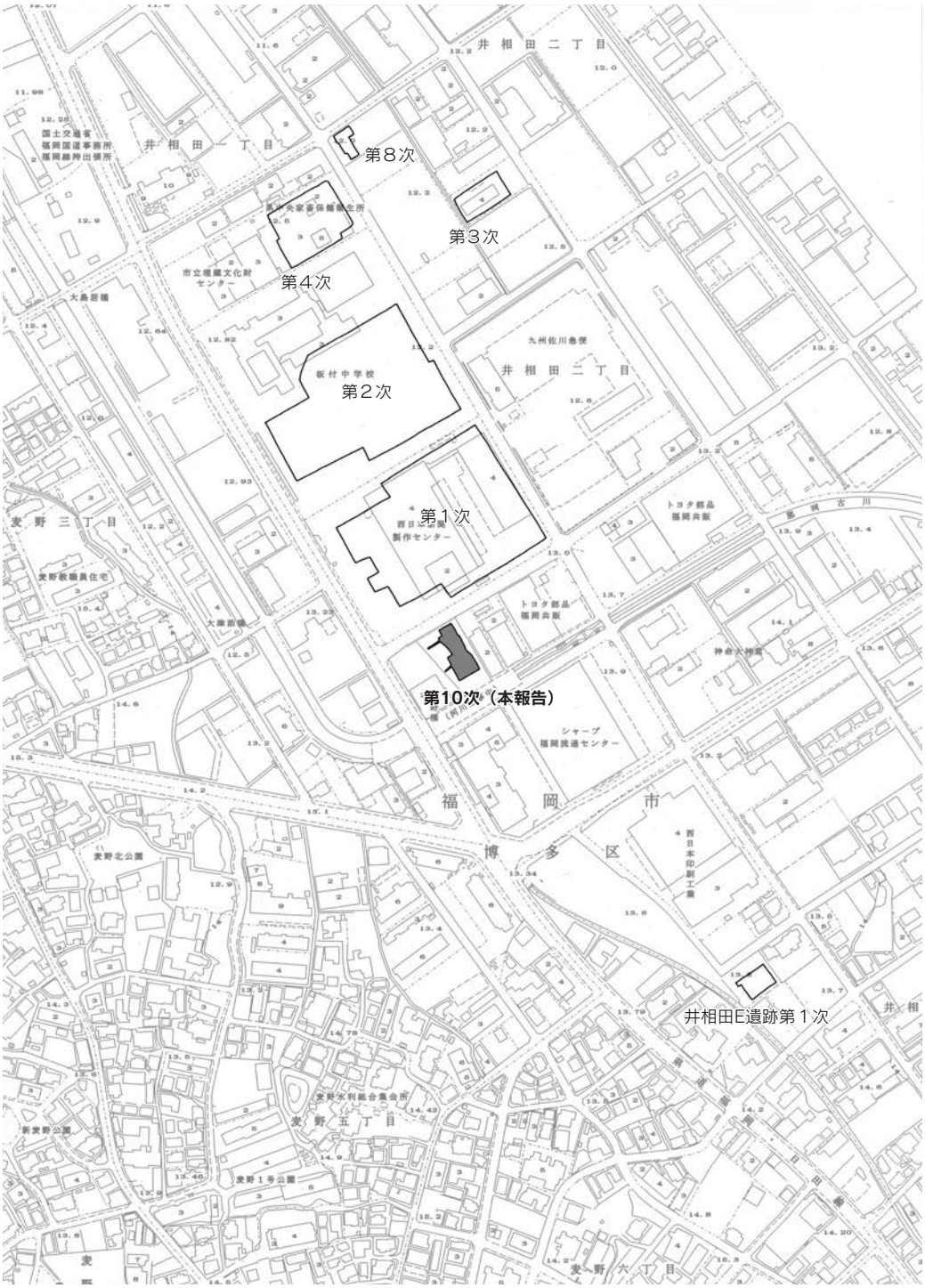


Fig. 2　調査区位置図（1/5,000）

Fig. 3　調査区位置図（1/1,000）

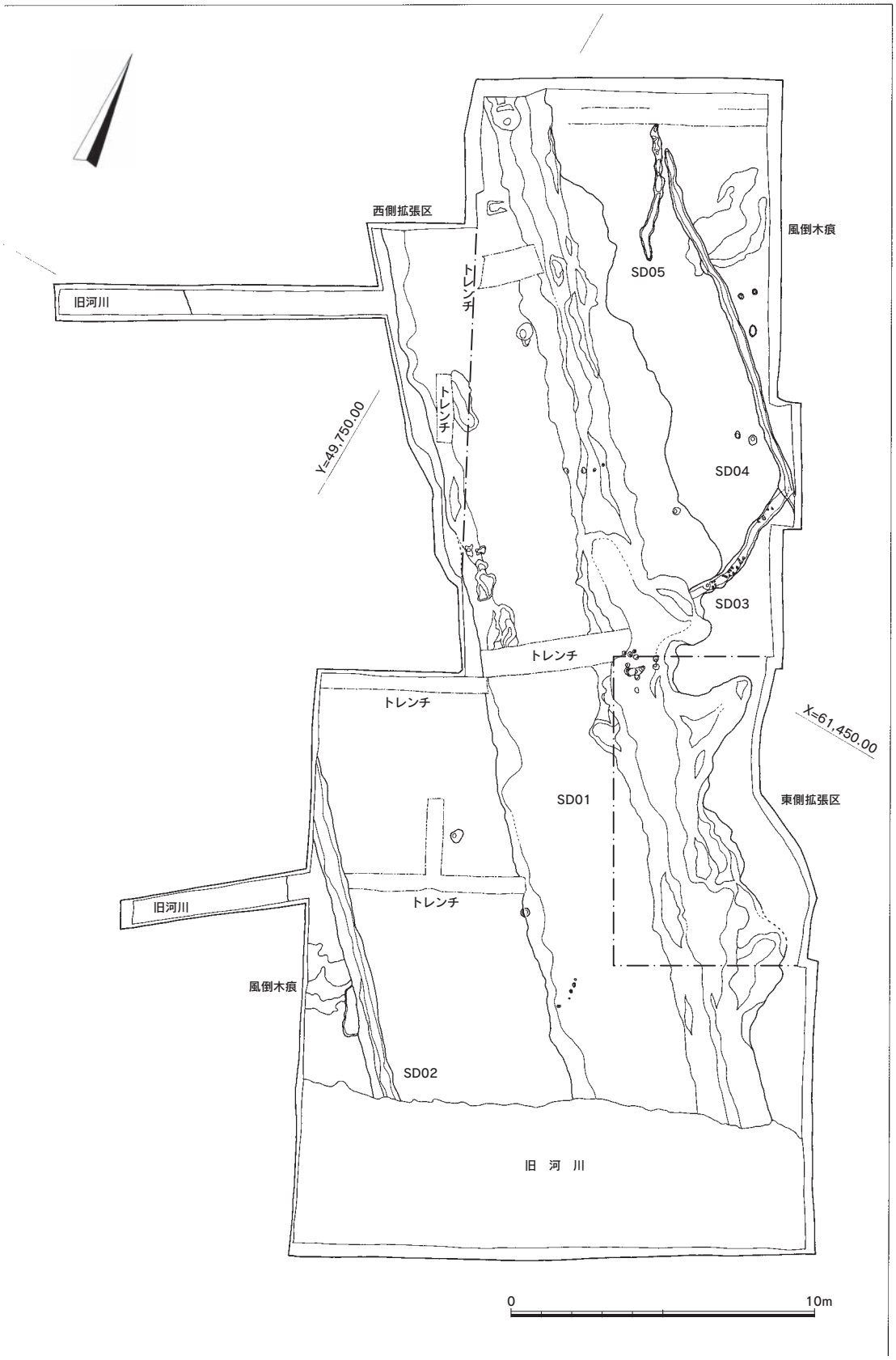


Fig. 4　調査区全体図（1/200）

第２章　調査の記録

１．調査の概要

今回の調査地は、那珂古川の北岸に広がる沖積微高地上に位置する。遺構は現地表面下－50cm、暗黄褐色～黄白色シルト質土上で検出した。遺構面はおおむね平坦で、遺構の遺存状況からも遺構面は大きく削られていると推測される。調査区南部は那珂古川の旧流路で遺構面のシルト層自体失われている。

今回の調査で検出された主な遺構は溝5条である。その他ピットを検出したが大半は木の根痕である。

溝SD01は座標北から約40度西偏してほぼ直線的に伸びる。幅8m、最も深い地点で60cmを測る。複数回の掘り直しがなされており、砂礫で埋まっていること、分岐する小溝があること、流れに直交する杭列がみられることから最終的に水路として利用されたものと推測される。出土遺物は溝からのものが主で、7世紀～8世紀代の須恵器が主体だが底面直上から黒色土器Ａ類椀が出土し、9世紀の早い段階に埋没しはじめたものと推測される。

溝SD01は道路を挟んで北側で実施された第1次調査区南西隅部検出の溝に接続するものとみられる。方位は、古代山陽道と西海道が合流し大宰府に至る所謂「水城東門ルート」のそれに合致し、位置は東側側溝にあたる。路面など道路特有の遺構がみられないため確証はないが、SD01は古代官道に関連する遺構の可能性が高い。

２．遺構と遺物

①溝（SD）

SD01（Fig.6･7･8･9）

調査区中央を南北に貫流する溝である。南端は那珂古川旧流路に切られる。方位は座標北から約40度西偏し、幅8m前後を測る。平面プランは、西辺が概ね直線的で掘りこみが明瞭であるのに対し、東辺は浅くなり出入りが顕著で、SD03のように小溝が分岐する箇所もある。

SD01とSD03については現場で精査を繰り返し切り合いを確認したが不明瞭で、下記する小ピット列からもSD01が水路として機能している期間にあら

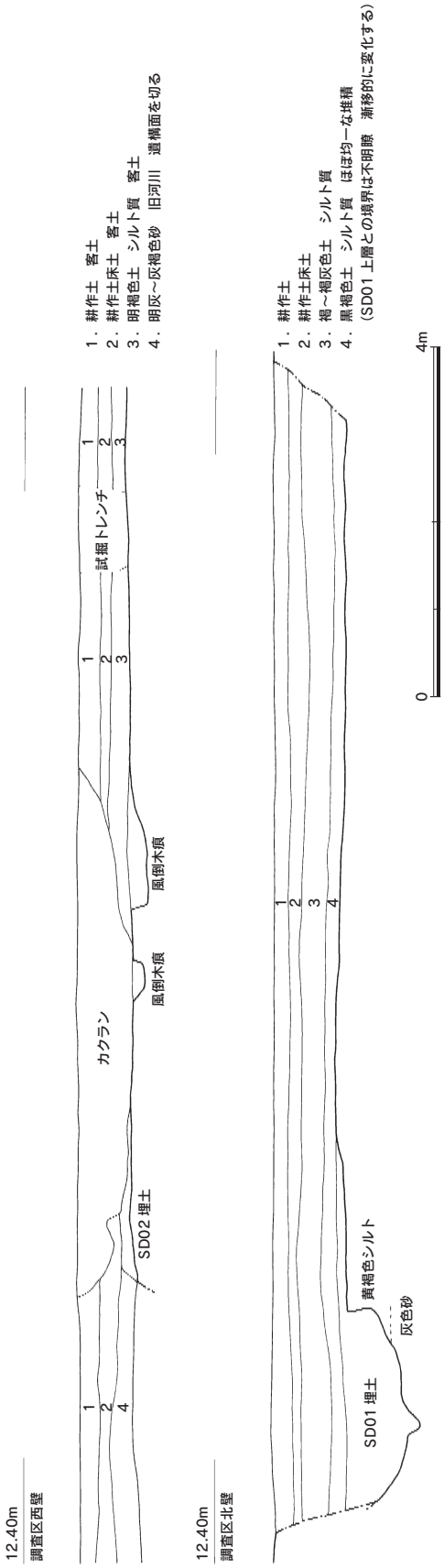


Fig. 5　調査区北壁・西壁土層断面実測図（1/80）

たに付設されたものと判断した。

SD01の深さは浅いところで30cm、深いところでは60cmを測る。底面は南から北に向けゆるやかながら標高を漸減させ、水は南から北に流れるよう構築されている。

底面には鉄分が沈着し溝の方位に平行してゆるい凹凸が認められるほか、内部に砂礫が堆積したピット状のくぼみがあるため、一定の期間つねに多くの水がいきおいよく流れる状況であったことがわかる。

底面からは木の根痕なども多く検出されたが、Fig.9に示すように溝の方向と直交して小ピットが並ぶ状況が2箇所検出された。SD01の東岸には北に向かう小溝SD03が派生している。上記の列状ピットはその下流（北側）に位置しており、後に水路として利用された際に小規模な井堰を構築した痕跡と推測される。なお、SD03派生箇所の3m南に顕著なバルジがみられ、埋土が水成の堆積状況を示すこと、北側に小ピット群を検出したことからここにも小溝が派生していた可能性がある。

土層断面図をFig.7に示す。埋土は上部の黒褐色土層と下部の砂礫層に大別できるが、溝の断面形から東部の深い部分と西部の浅く概ね平坦な部分で埋土の堆積に差異がみられる。何れの土層断面においても東側の深い部分では下部に砂礫の堆積がみられるのに対し、西側の浅い部分では砂礫の堆積はなく、黒褐色土の下層には遺構面の黄褐色シルトがブロック状に混じる黒色土が堆積し、すくなくとも西側部分を1回は人為的に埋めているものと推測される。

さらに観察を進めると東側の深い部分の埋土が西側の浅い部分の埋土を切っており、西側の浅い部分埋没後、東側に新たに深い溝を掘り直したことがわかる。掘り直しとしてはこれがもっとも顕著なものだが、土層からは掘り直しが疑われる不整合が複数観察され、たびたび埋没と掘りなおしが繰り返された状況が見て取れる。

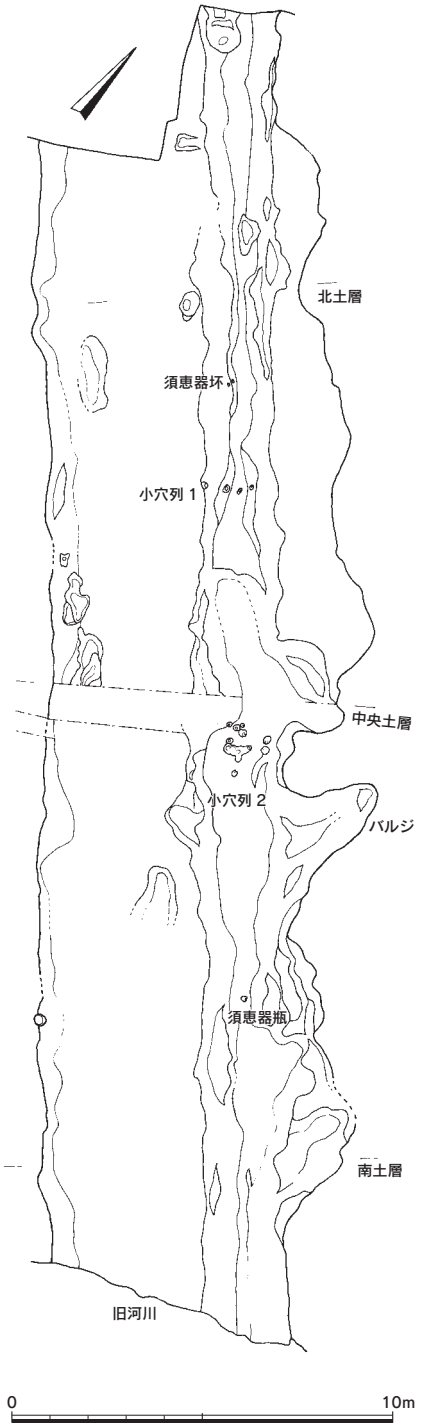


Fig. 6　SD01実測図（1/200）

出土遺物（Fig.10・11・12）

遺物は主に下部の砂礫層から出土した。7～8世紀代の須恵器が主体で土師器は少ない。Fig.8に示すように頚部を打ち欠いた須恵器瓶が砂礫層から出土しており、流水があった時期に何らかの祭祀をおこなっていた可能性がある。

Fig.10には上部の黒褐色土層出土の遺物をまとめた。

1～5は土師器である。1は蓋である。天井部の小片で、低くつぶれた形のつまみを有する。残存高1.8cmを測る。2・3は坏である。2は底部を欠損し1/4個体残存する破片で、口径12.9cm・底径6.4cmに復元され、器高4.7cmを測る。口縁部は丸く収める。外底はヘラ切り、板圧痕はない。3は1/2個体

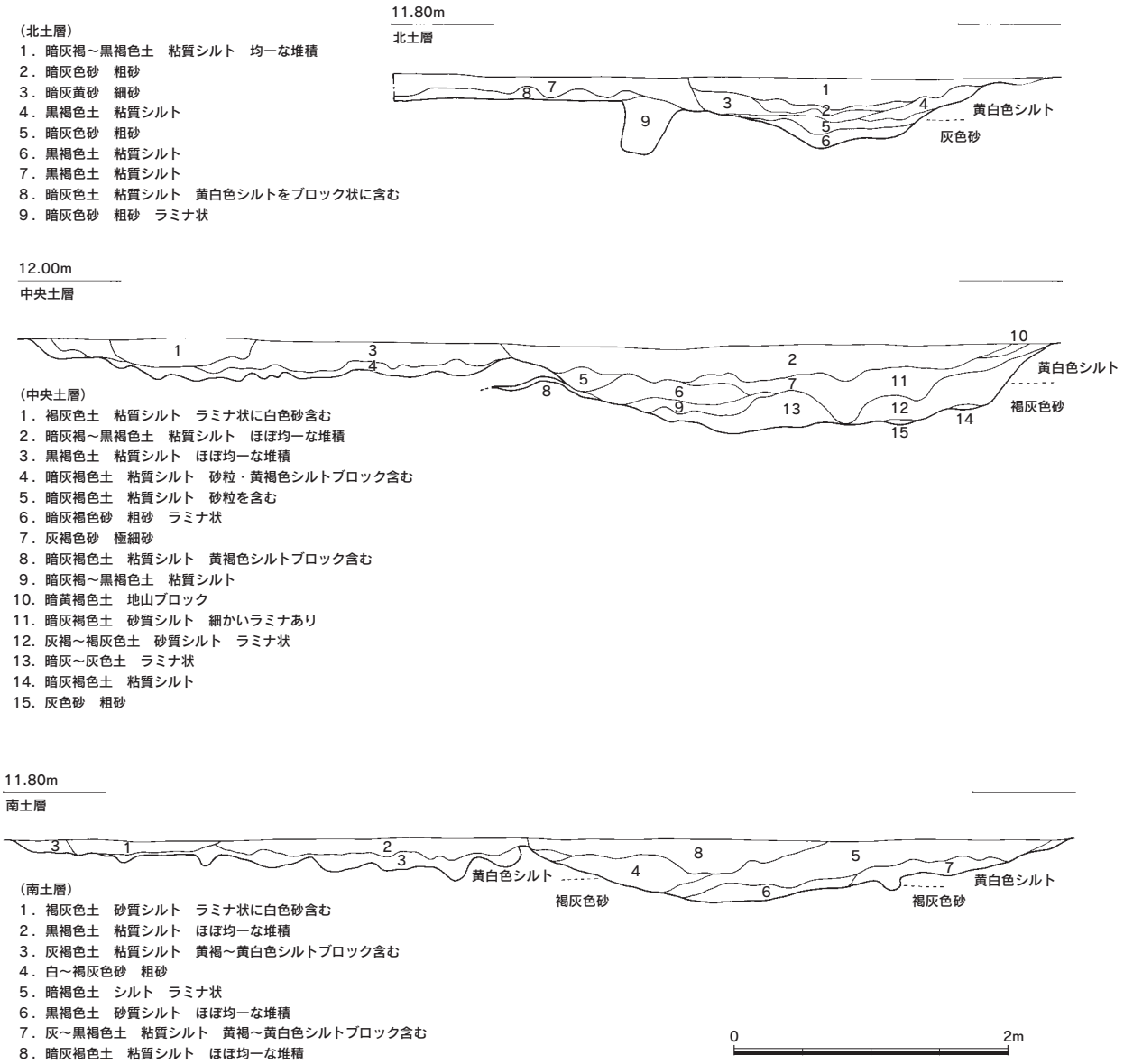


Fig. 7　SD01土層断面実測図（1/50）

残存する破片で、口径14.2cmに復元され、器高3.5cm・底径10.4cmを測る。外底面はヘラ切り、板圧痕を有する。口縁部外面一帯は灰黒色を呈し、重ね焼きした状況が窺われる。4は坏ないし皿。大形の底部である。小片で底径12.4cmに復元され、残存高1.5cmを測る。5は甕である。口縁部の小片で、口径30.0cmに復元され、残存高4.7cmを測る。口縁直下の外面に沈線上のくぼみを一周させる。今次調査出土土師器は一般に摩滅が著しいなか、器壁の残りは良好で調整は明瞭である。

6～11は須恵器である。6～10は坏。うち8までは底部を欠く小片である。6・7は外反する口縁部を有する。6は口径12.8cmに復元され、残存高4.5cmを測る。7は口径12.4cmに復元され、残存高4.9cmを測る。8の外面は暗灰色～赤褐色を呈する。二次的な被熱痕跡ではない。口径14.0cmに復元され、残存高4.9cmを測る。9・10は底部の小片である。9は底径8.2cmに復元され、残存高2.0cmを測る。10は底径10.8cmに復元され、残存高2.5cmを測る。11は高杯である。脚部の破片で、残存高8.8cmを測る。

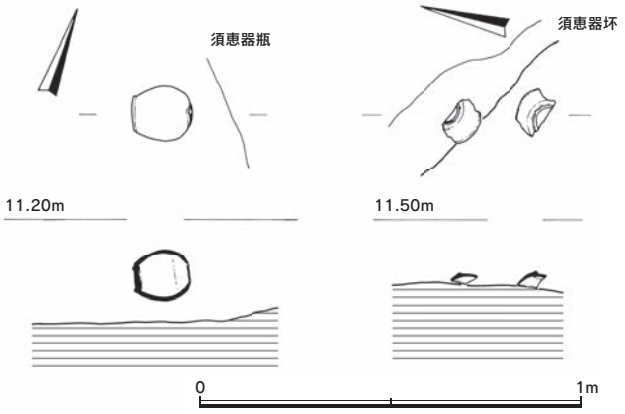


Fig. 8　SD01須恵器出土状況実測図（1/20）

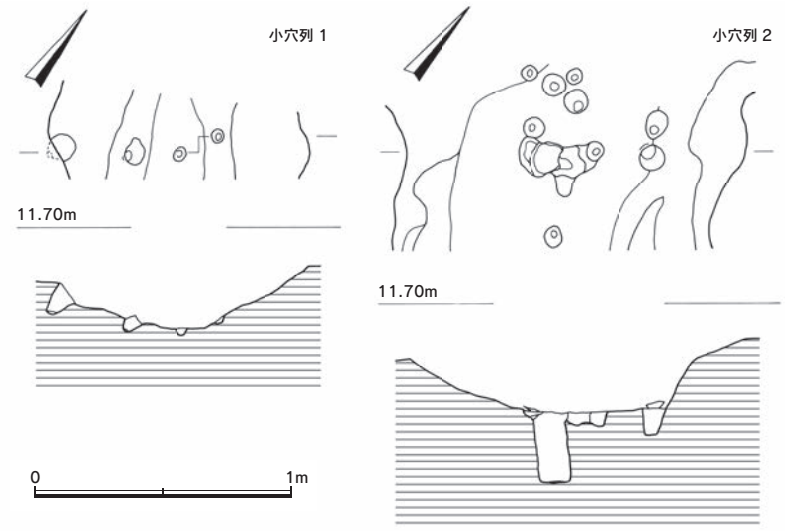


Fig. 9　SD01小穴列実測図（1/30）

透かし穴はみられない。何れの須恵器も胎土は精良堅致で焼成は良好である。

12は瓦である。平瓦と思われる小片で、残存長4.1cm・残存幅5.6cmを測る。凹面に縄目叩き痕を有する。焼成はやや不良で器壁は明黄灰色を呈する。

13は黒曜石製打製石鏃である。一方の脚部と先端部を欠損し、残存長2.6cm・残存幅1.8cm・重量1.45gを測る。

Fig.11には東側下部の砂礫層および底面直上から出土した遺物で須恵器以外の土器を集めた。

1は瓦器である。これのみ時期が新しく混入の可能性がある。坏の小片で、残存高3.0cmを測る。2は黒色土器A類である。埦底部の小片で、西側の浅い部分の底面直上から出土し、これがSD01埋没の時期を示す遺物であろう。底径6.1cmに復元され、残存高1.6cmを測る。高台まわりのエッジは明瞭で陶磁器に似る精製品である。3～7は土師器である。3は坏ないし皿。口縁部の小片で口径14.2cmに復元でき、残存高1.8cmを測る。4は坏。底部を欠く小片で口径15.2cmに復元される。薄く成型され口縁は内傾する。5は埦である。底部を欠く小片で、口径17.8cmに復元され、残存高5.0cmを測る。外面には焼成前にヘラ状の工具で一部を削られた痕が観察できる。6･7は甕である。何れも口縁部付近の小片で､口径を復元するに至らなかった。8は不明土製品である。図でいう上面に布目の痕跡が観察できる。残存幅4.0×2.4cmを測り、焼成は良好である。

Fig.12は東側下部の砂礫層および底面直上から出土した土器を示す。1～6は須恵器坏である。1は出土状況をFig.8右に示す。底面直上にて出土。ほぼ完形に復元できた。口径11.3cm・器高4.4cm・底径7.7cmを測り、高台はにぶい山形をなす。焼成はやや不良で器壁は摩滅する。2は1/4個体残存する破片で口径12.2cm・底径7.4cmに復元され、器高4.8cmを測る。3～6は小片。3は器壁薄く口径13.2cm・底径8.4cmに復元され、器高4.6cmを測る。4は口径14.2cm・底径10.6cmに復元され器高6.2cmを測る。焼成はやや不良で器壁は摩滅する。5は底部を欠き口径14.6cmに復元され残存高は4.2cmを測る。6は口径等復元するに至らず、器高6.0cmを測る。7は土師器坏である。底部の小片で大形品。底径13.0cmに復元され、残存高2.1cmを測る。器壁は薄く内面はミガキを施す。8は須恵器短頸壺。残存高2.5cmを測る。9～12は須恵器蓋である。9～11は天井部を欠く小片。9は口径13.4cmに復元され、

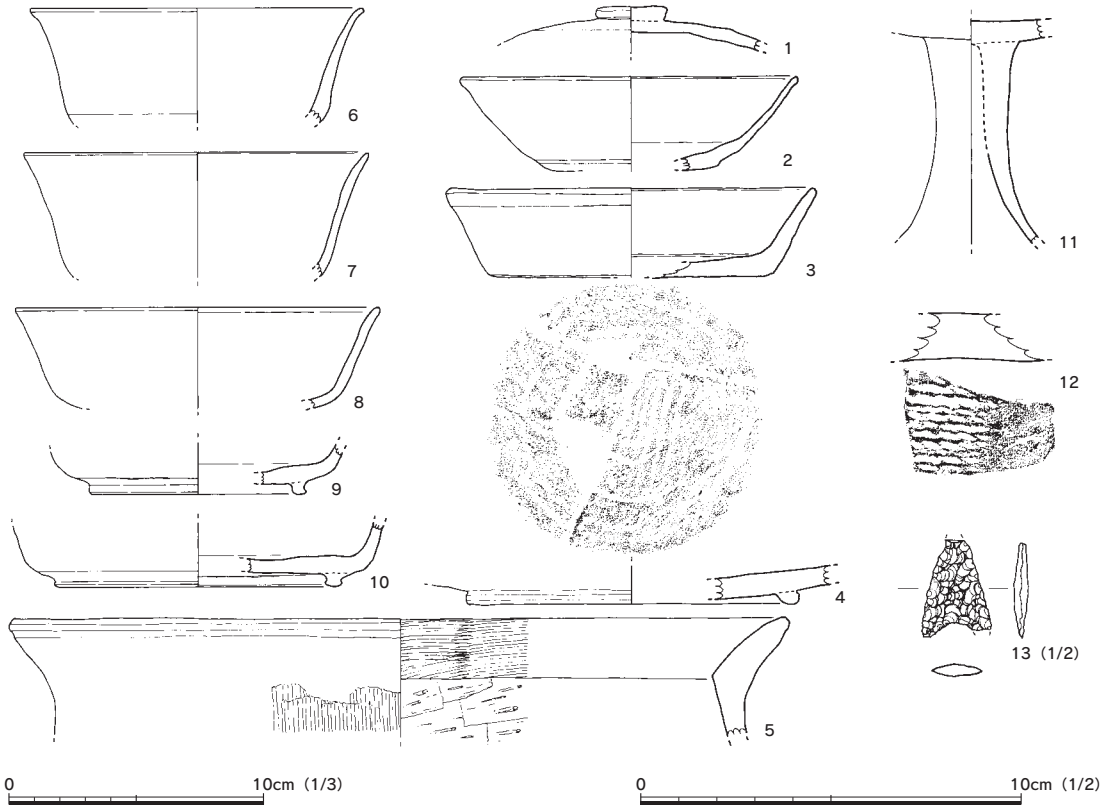


Fig.10　SD01上層出土遺物実測図（1/3）

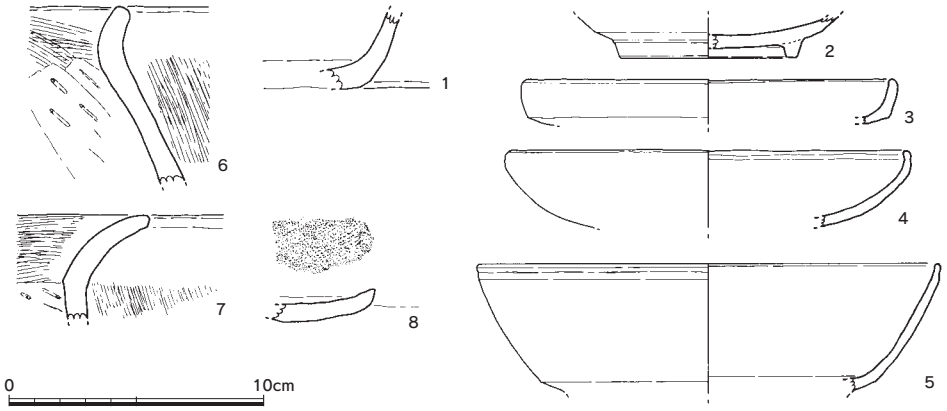


Fig.11　SD01下層出土遺物実測図1（1/3）

残存高1.7cmを測る。天井部外面に不定方向のヘラケズリを施す。10は口径15.4cmに復元され、残存高1.5cmを測る。焼成はやや不良で軟質である。11は口縁部内面にかえりを有する。口径15.8cmに復元され、残存高2.4cmを測る。焼成は不良で土師器に似る。12は1/4個体残存する破片である。口径20.0cmに復元され、器高2.3cmを測る。天井部に焼けひずみがあるが焼成は良好で堅致である。

13・14は須恵器長頸壺または瓶の頸部である。13は口縁付近以外は概ね残存。外面に薄く自然釉がかかる。口径11.8cmに復元され、残存高13.8cmを測る。14は小片である。口径12.2cmに復元され残存高も同じ数値。焼成はやや不良である。

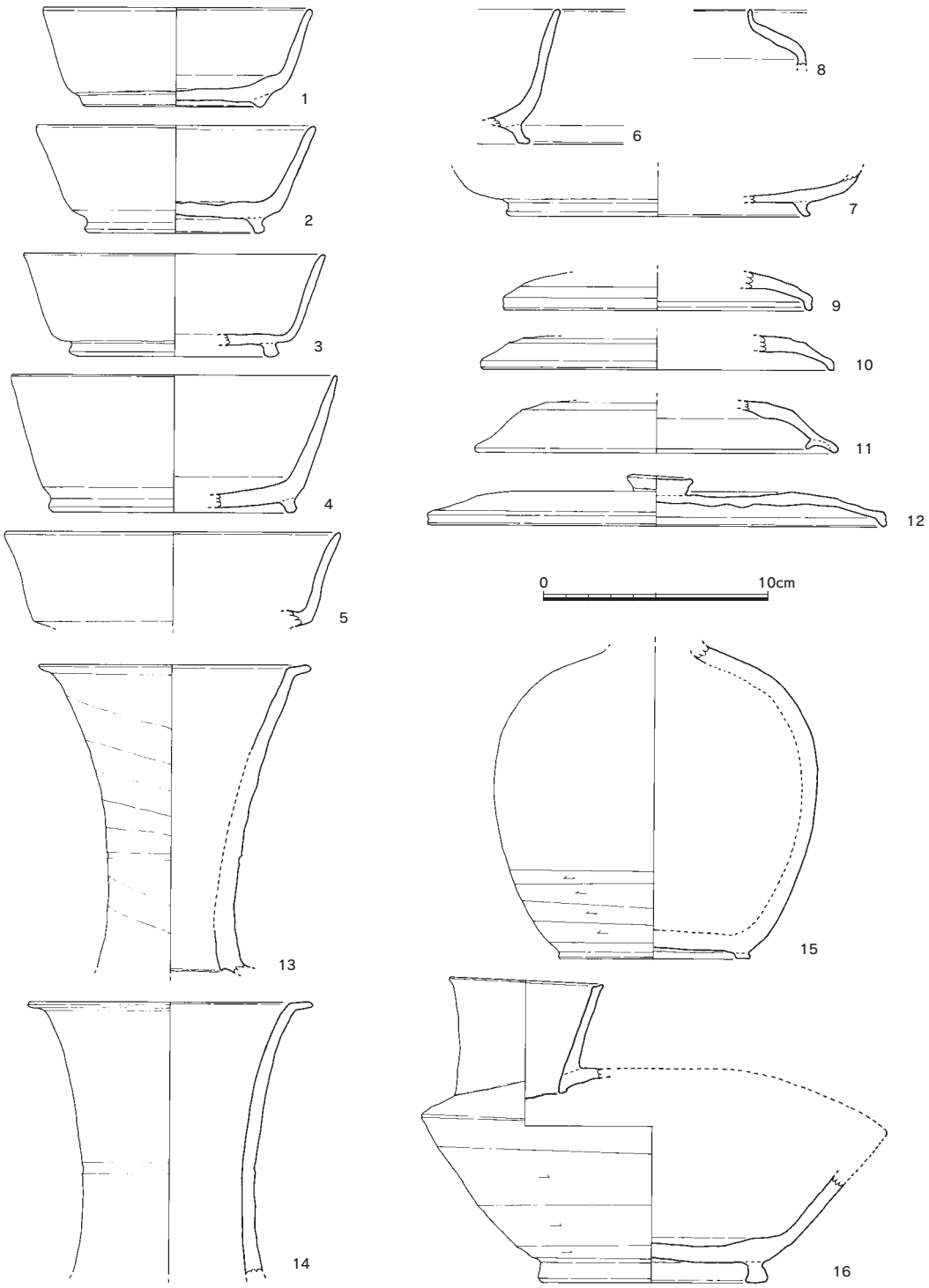


Fig.12　SD01下層出土遺物実測図2（1/3）

15はFig.8左に出土状況を示す。須恵器瓶である。胴部はほぼ完存しており底径7.2cm・残存高14.0cmを測る。頚部はなく、接合できる破片もなかったことから意図的に頚部を折り取り、胴部のみSD01に投げ込んだものと推測される。16は須恵器平瓶である。底面直上にて出土。2/3個体残存し口径6.8cm・底径9.9cm・器高14.6cmを測る。成型後の天井部に穿孔し頚部を取り付けている。胴部下半

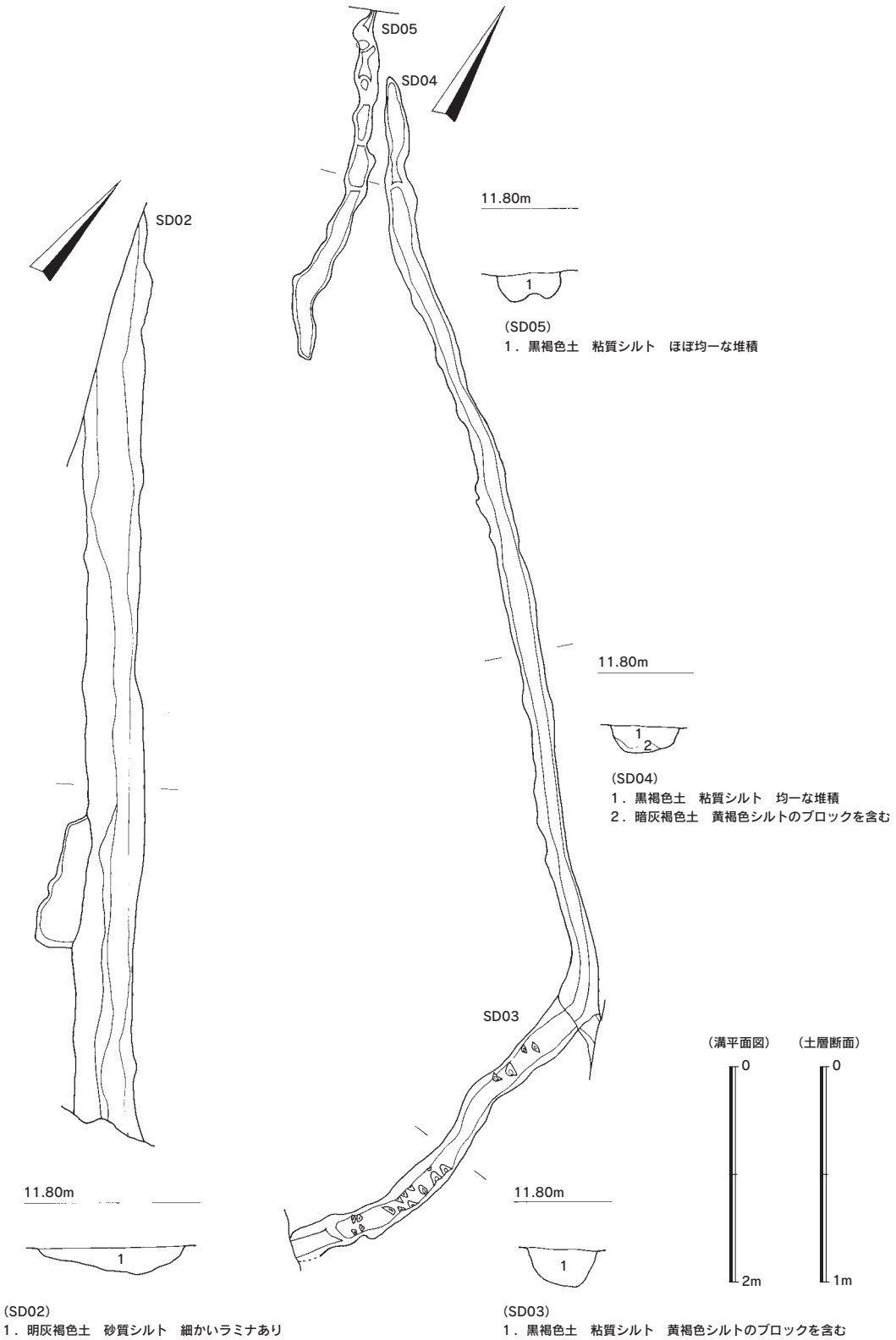


Fig.13　SD02・03・04・05実測図・土層断面実測図（1/60、1/30）

Fig.14　遺構検出面出土土師器実測図（1/3）

は回転ヘラケズリ。胴部は長頸壺の形態である。高台部分に自然釉がわずかにかかる。

SD02（Fig.13）

調査区西縁辺部にて検出した。SD01に概ね平行し、那珂古川旧流路に切られる。「水城東門ルート」西側溝の可能性も考えたが、溝の規模、西側溝としたとき他地点に比し道路幅が極端に狭くなること、埋土がSD01と異なることからその可能性は低いと判断した。仮に道路側溝とするならSD01とセットになるとは考えがたい。

SD02の幅は70 ～ 80cm、深さ5 ～ 10cmを測る。底面の標高は北に向けてわずかに低くなる。埋土は明灰褐色シルト質土で、流水していたことを示す。道路廃絶後に構築された水路であろう。

遺物は須恵器甕の小片が1点出土したのみである。

SD03（Fig.13）

調査区北部にて検出した。概ね南北方向に延びる溝である。SD01との切り合いは明瞭でなく、SD01の項で述べたように後にSD01から派生させた水路と推測される。幅30 ～ 50cm・深さ15 ～ 20cmを測る。底面には三日月形のくぼみが2列にならび、溝掘削時の鋤の刃痕と推測される。埋土は遺構面の黄褐色シルトをブロック状に含む黒褐色土で、人為的に埋めている可能性がある。

遺物は土師器および須恵器甕細片が各1点出土したのみである。

SD04（Fig.13）

調査区北部にて検出した。南東－北西方向に延びる溝である。SD03を切る。ただし底面はSD03と連続しており、これを一部埋め立てた後、南側に新たな溝を掘削しSD04に付け替えたものと推測される。幅25 ～ 30cm、深さ10 ～ 15cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトでほぼ均一に堆積し、自然堆積の状況を示す。

遺物は出土しなかった。

SD05（Fig.13）

調査区北部にて検出した。SD04に隣接し南東－北西方向に延びる溝である。遺構面が削平を受けているためさらに南北方向に延びるものと推測される。幅20 ～ 35cm・深さ3 ～ 10cmを測る。底面には凹凸が多く断面は皿状となる。埋土は黒褐色の粘質シルトでほぼ均一に堆積し、自然堆積の状況を示す。

遺物は土師器細片が1点出土した。

第3章　まとめ

今回の調査では、複数の溝を検出したほか顕著な遺構はみられなかった。ただしそのうち1条は古代官道「水城東門ルート」の一部をなす可能性が高い。ここではその溝SD01にしぼって遺構の性格等を検討したい。

水城東門ルートとは、水城東端に設けられた門を経由し山陽道と交差、大宰府から現在の博多遺跡群へと向かう古代官道である。方位は真北から40°強西に偏し、概ね直線を維持している。古代山陽道と西海道はこのルートを経て大宰府へと至るものであり、九州全域で最も重要な幹線のひとつであったと推測される。

今回の調査で検出した溝SD01は、東岸は出入りが多く不整だが西岸は概ね直線的で、遺構面の削平が大きく路面など決定的な遺構は検出できなかったが、周辺の調査例で検出された同種の溝から水城東門ルート東側溝と推測される。西側溝は当初設定された調査区内では検出されず（SD02は前述の通り道路側溝の可能性は低い）、調査区西側に2本のトレンチを設定し確認をおこなったところ、調査地西側の1/4以上は那珂古川旧流路となり遺構面自体が失われていた。ただし調査地西縁の地割りはここだけ周囲と異なって官道の方位に沿っており、既往の調査で検出された道路幅は12～18mを測ることから調査地西縁付近に西側溝があった可能性が高い。

SD01の出土遺物は7世紀後半～8世紀後半頃までの須恵器が主体だが、底面直上で黒色土器A類埦が出土している。出土位置は西側の浅い部分で、土層断面からはこの部分埋没後東側に深い溝を掘りなおしていることがわかる。したがってこの黒色土器は西側の浅い部分埋没の時期を指し示すもので9世紀初頭～前半とみられる。この前後が側溝が機能していた時期となろう。

SD01は複数回の掘りなおしがなされている。個別の掘りなおしの時期は明らかにできなかったが、もっとも顕著なものは上記した東側への掘りなおしである。この部分は下部に砂礫が堆積しており常に一定量の水が流れる状況であった。底面から流れに直交する小ピット群が2箇所検出されており、付随する小溝に導水するための井堰の痕跡と推測される。つまりSD01は用水路の機能をも有していたわけで、現在の那珂古川から北に広がる水田へ水を供給していたのだろう。用水路となったのが官道廃絶の前後いずれであったのかはわからない。しかし上記の通り現在の地割からも廃絶後かなり後まで水城東門ルートの痕跡に土地の区割りが規制されていたことは明らかである。

さて、溝SD01の掘削時期を近隣の発掘調査例および出発点・到達点の遺跡からさぐってみたい。

本調査区の北隣接地では井相田C遺跡第1次調査時にSD01に連続する溝SD293・294が検出されており、9世紀代～10世紀初頭頃の遺物が出土している。本調査区の南東約240m地点では井相田E遺跡第1次調査が実施された。南東－北西方向に延びる2条の並行する溝が検出されており内法12mを測り、遺物は溝の底面直上から8世紀代の須恵器が出土している。これらの溝を延長すると、東側の溝が今回の調査で検出されたSD01につながってくる。他に水城東門ルートの側溝とみられる溝を検出した事例では8世紀段階で道路が整えられ、12世紀段階で再整備が行われたとされている。

水城東門ルートの両端は大宰府と博多遺跡群とされる。大宰府は8世紀第2四半期にそれまでの掘立柱建物を礎石建ちの建物群に改め、朝堂院形式の配置とし儀礼空間として整備された。鴻臚館は8世紀前半に大規模な造成を行い、掘立柱ながら南北に同規模の建物が構築された。一方博多遺跡群では8世紀代に正方位をとる方形区画が出現し、大型掘立柱建物跡や井戸、遺物では銙帯や円面硯等官衙的遺物の出土がみられる。この施設や大宰府、鴻臚館を含め、8世紀段階で実施された公的施設の整備・拡張とセットにして、それらを直接結ぶ最短ルートとして、また日本国内有数の幹線である山陽道の最終区間として水城東門ルートが構築されたと考えたい。このことが確かとすれば今回の調査で検出した溝SD01は8世紀、おそらく前半の掘削となろう。

溝SD01完全埋没、ないし官道廃絶の時期は現場でも、遺物の検討からも確認できなかった。水城東門ルート他地点の調査では12世紀代の陶磁器類が側溝の上層から出土し、この時期に再整備がなされた可能性が指摘されているが、今回の調査ではそこまで新しい遺物は出土していない。北に隣接する第1次調査検出で今次調査SD01と接続するとみられる溝SD293・294でも同様で、本調査区の周辺では河川の近傍で地盤が安定せず、道路再整備は見送られたのかもしれない。

水城には東門のほかに西門とされる切り通しがある。大宰府を発しここを経由する道路は東門ルートよりさらに西偏し、鴻臚館へと向かっている。推定ルート上での調査例から道路が機能していた時

期は8世紀一杯とされ、今回の調査でSD01から出土した遺物からみると道路としての機能停止は東門ルートより早いようである。ただし上記の通り2つの道路は一時にせよ同時に使用されていた可能性があり、西門ルートは何らかの事情で鴻臚館から大宰府へ直接陸路を取る必要がなくなった、ないし取れなくなったため早期に機能を停止したとも考えられる。

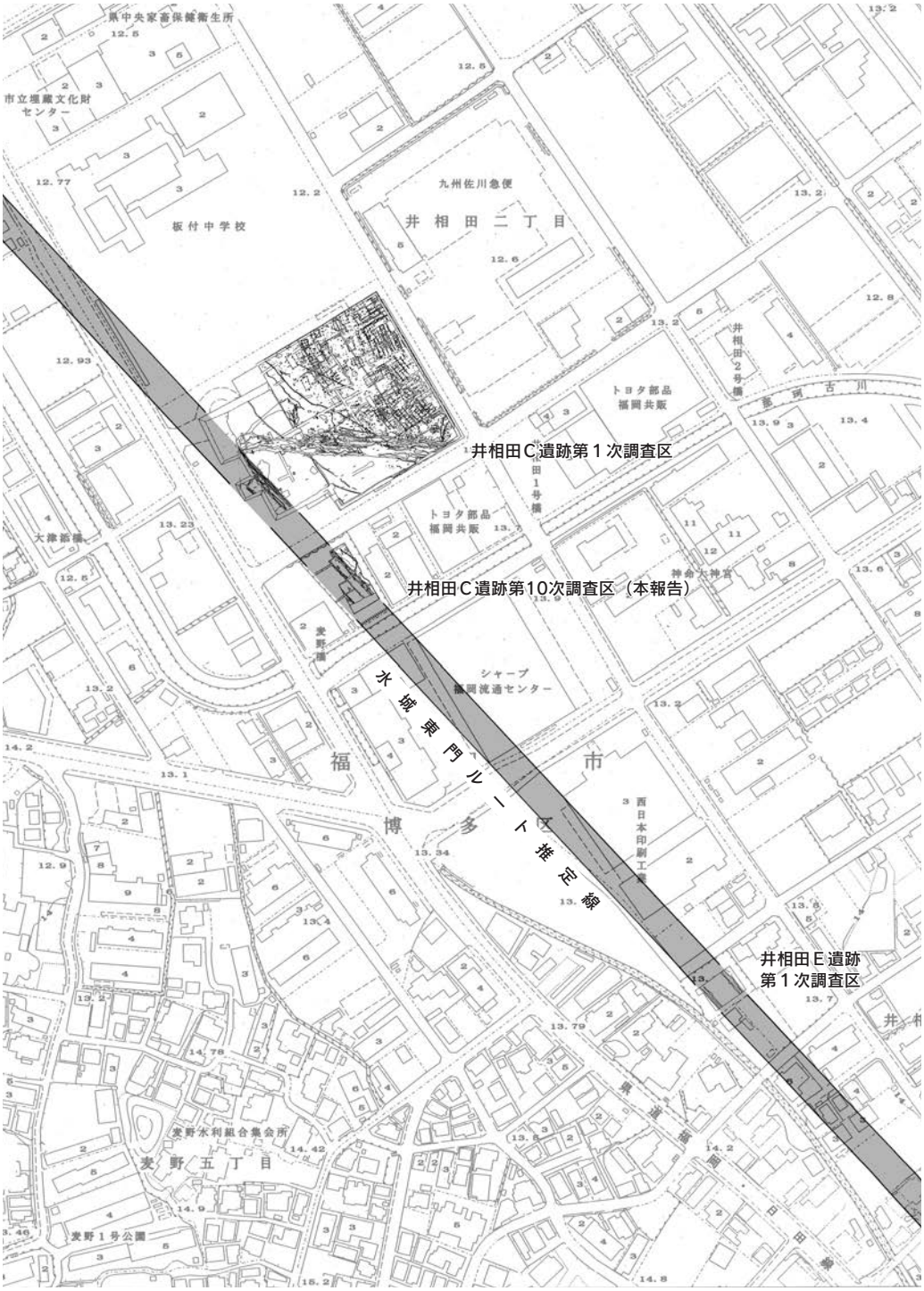


Fig.15　井相田C遺跡第10次調査検出の官道側溝と他地点の状況

1. 調査区全景（南より）

2. SD01（南より）

3. SD01東拡張区全景（西より）

PL. 2

1. SD01西拡張区全景（南より）

2. SD01北土層断面（南より）

3. SD01中央土層断面（西より）

1. SD01南土層断面（南より）

2. SD01北小穴列（南より）

3. SD01須恵器坏出土状況（西より）

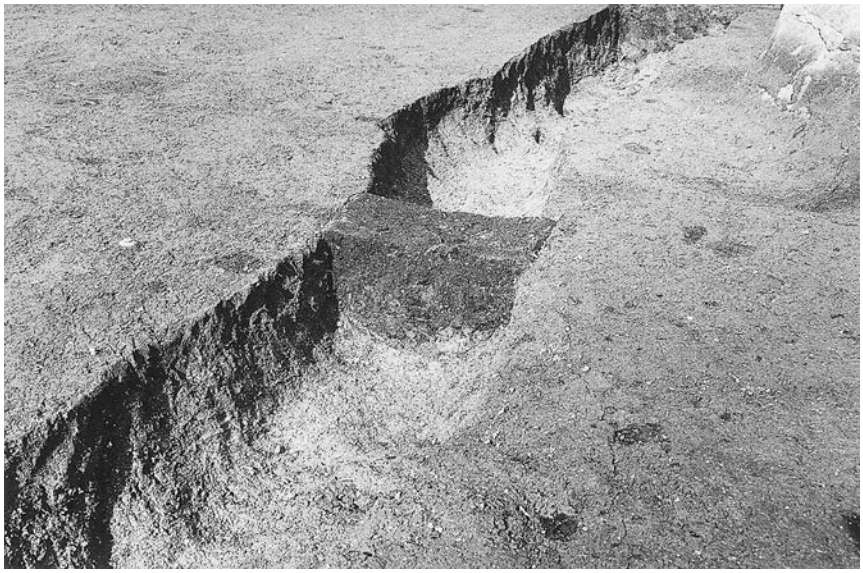
PL. 4

1. SD01須恵器瓶出土状況（西より）

2. SD02（南より）

3. SD02土層断面（南より）

1. SD03・SD04（南より）



2. SD03土層断面（西より）

3. SD04土層断面（南より）

PL. 6

1．SD05土層断面（南より）

2．調査区北壁土層（南より）

3．出土遺物

報　告　書　抄　録

ふりがな	いそうだしーいせき
書　名	井相田Ｃ遺跡 9
副書名	井相田Ｃ遺跡第10次調査報告
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第1179集
編著者名	阿部 泰之
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8622 福岡市中央区天神一丁目8番1号 TEL（092）711－4667
発行年月日	平成 25 年 3 月 22 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
井相田Ｃ遺跡 第 10 次	福岡市博多区井相田 2丁目6番4	40130	2630	33° 33′ 10″	130° 27′ 52″	2011・12・12 ～2012・2・3	592 ㎡	共同住宅 建築

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
井相田Ｃ遺跡	古代官道	奈良・平安	溝	須恵器・土師器・黒色土器	水城東門ルート

要　約	今回の調査で検出された溝SD01は道路を挟んで北側で実施された第1次調査区南西隅部検出の溝に接続するものとみられる。方位は、古代山陽道と西海道が合流し大宰府に至る所謂「水城東門ルート」のそれに合致し、位置は東側側溝にあたる。路面など道路特有の遺構がみられないため確証はないが、SD01は古代官道に関連する遺構の可能性が高い。

井相田Ｃ遺跡　9

―井相田Ｃ遺跡第10次発掘調査報告―

福岡市埋蔵文化財発掘調査報告 第1179集

平成 25 年 3 月 22 日

発　行　　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目８番１号

印　刷　　松影堂印刷株式会社
福岡市博多区吉塚五丁目13番40号